転機となった行橋カトリック教会の作品。形では見えない、数字では見えないものが加わった時が、初めて芸術だと僕は思う。

九十九（つくも）　伸一（しんいち）

画家

スペインの太陽の下で描かれた力強い線と明るい色彩、
まるで音楽のように心に響いてくるメッセージ。
画家として独自の世界をつくり出してきた九十九伸一さんがインタビューに登場です。
「天使の空」をテーマに画廊梵天と旧門司税関で行われた個展の忙しい合間をぬって、
ミラノ時代やバルセロナでの制作活動のこと、
転機ともなった行橋カトリック教会の作品について語ってくれました。

PROFILE

1955年行橋市生まれ。1980年九州産業大学大学院卒業後ミラノへ。1986年よりバルセロナへアトリエを移す。1989年バルセロナ国際現代美術展、1990年ベルリン国際版画トリエンナーレ等に出展、1999年には福岡市美術館に於いて「九十九伸一の宇宙展」を開催。また、2001年スペイン国際現代美術展に出展し、スペインの国王陛下に賞賛される（以後2年おきに出展）。2005年より行橋カトリック教会50周年プロジェクトとして、ステンドグラスや壁画を制作。イタリア、スペイン、メキシコ、東京、下関、福岡等国内外各地で個展を開催している。

構築性のある世界を学びたいと、まずはミラノへ

現在はスペイン・バルセロナで制作活動をしている九十九伸一さんですが、大学院卒業後最初に選んだ地はミラノでした。「二次元をやるためには、三次元、いわゆる立体が分からないと平面に還元することは無理だと思いました。西洋というのは立体社会、そういう構築物のある中で生活をして、形態、モノの骨格とか構造とか、構築性のある世界をまず学びたかったんです」。

そんなミラノ在住中、九十九さんはスペイン旅行に出かけます。当時のバルセロナは物価も安く、"都会"と呼ぶにほど遠い町。素朴なイメージと気候風土が油絵に適していると感じました。元々フレスコ画のような油絵を描きたいと考えていましたが、斜がかかったようにモノが柔らかく見える、発色も反映しにくいなど、ミラノの気候風土は油絵に適していません。九十九さんはミラノで版画家としてデビュー、白黒の仕事を中心に行ってきましたが、この旅をきっかけに、本来の目的であった油絵の創作をやろうとバルセロナに移りました。

寒い時期が長く閉じこもることが多かったミラノ時代、昼夜逆転で夜を中心に仕事をしていましたが、太陽に恵まれた国の中でそういうスタイルではいけないと決意。アトリエの電球を全部はずし、現在も太陽との勝負で日々作品を生み出しています。

全ての形態にメッセージが込められている。

「最初は1本の瓶とかバケツとかチェロとか。今考えると、僕が選ぶ形態は全て空間を包むものでした。職人によって生み出されたモノのバランスの美、造形の機能美に触れてテーマにすることが多かった」。

転機となったのが、ボランティアで行った行橋カトリック教会50周年プロジェクトでの制作です。九十九さんの元にステンドグラスの制作依頼が舞い込みましたが、信者でもなく、予備知識もなかったため一旦断ろうとします。しかし、偶然にも教会が誕生したのは九十九さんが生まれた年。結局引き受けることになりました。

「聖書も読んでいない人間がそのデザインを手がけようとした時、天使というのはこれまで多くの画家に描かれてきたし、僕も教義があまり分からなくても入り込めるテーマかと思い選びました。でも、それまで目で見たものしか描いたことがなかった。苦しみ、あきらめた時に見えてきたのが、人間と天使の違いは翼だ、と：。僕はまず翼だけの天使を、翼の部分だけを天使像に置き換えました」。その後も天使は九十九さんのテーマの一つとなり、翼だけだったそれは今年全体像が完成しました。

さらに、神父さんより『聖霊降臨』というテーマを与えられます。悩みながらも、神の道を想像するような作品をつくりあげますが、眺めているうちに"こんなものは全部でっちあげだ"と画面の中から真実が九十九さんを責めてきました。「辞めてしまおうと、他の仕事に取りかかりましたが、描かせてくれない。耳元でつぶやくわけですよ、"これが描けないと、あなたが求めようとする絵画の世界は全部いつわりだ"、と」。これは何年かかっても挑戦するしかないと決心し、初めて聖書を開きます。すると一説に嵐、雷鳴とともに炎のような舌が降りてくると書かれてありました。「そこがU字形、僕が描く天使の翼やバケツ、チェロ、いわゆる楕円が割れて動いていた動きだったんですよ。自分が自信

旧門司税関個展会場

を持って何十年も描き、抽象的な形にもってきた視点。この頃からすべての形態にメッセージが込められていると感じ、初めて自分の精神性や内面、形以外のことに求めるテーマを考えるようになりました」。

さらに、九十九さんはこう続けます。「地球上で僕たちが努力して行っていることは数字の中の世界。でも、神様は数字でははかってもらえない、そこに加わるものです。そういった形では見えない、数字では見えないものが加わった時が初めて芸術だと、僕は思うんですよ。でも、何が来るかというのは自分が決めていくのではなく、流れや関わりの中で与えられる。そこで自分がそれを受け入れる体制や力を持っているか、より深めた美しさ、美という形に置き換えられるかどうかですよね」。

瓶やバケツ、物質そのものがテーマだと思っていた九十九さん。しかし、それはあくまでも道具立て、むしろそれらが包む空間や空気、時間、音の動きといった目では見えない、形では表現できないものが捉えたかった世界だったと気づいたのです。「それこそまさに四次元に移行している、現代社会が一番求めている課題。物質文明から物質文明ではない世界ですよね」。

自分が目的としていたものが最終地点ではない。一つの点の経過でしか過ぎない。

九十九さんの語る言葉はそのまま、人生とは何か、どのように生きていくのかにも通じています。「自分が目的としていたものが最終地点ではない、一つの点の経過でしか過ぎない。その経過を過ぎて初めて見えてくるものがまた現われるのでしょう。僕にとって大切なのは、どれだけ多くの人と自分の持っている概念を共有できるかということ。概念というのは常に移り変わっていきます。でも、本質は変わらないし、それを見失わないようにしないといけない」。それは恩師であった画家・坂本善三さんが言い聞かせてきたことでもあったそうです。

さて、最後に画家という職業ならではの視点で、人と人のかかわりの中で"嫌う"ということを、丸い物体と時間の経過になぞらえて話してくれました。「丸い物体と時間の経過を一緒にします。そうした場合どんなに大きくてもどんなに小さくても、その丸い物体の反対側は絶対見えない。確認しようと裏側にいって確認して戻ってきて理解したと思っても、反対側にハエが止まっていたり（笑）。どんな人でもどんなことでも、実はその一面しか見えていないんですよ。それが全体だと決め付けない。だから、そういったことが分かっていれば、許し合えるというか分かち合えるような気がするんです」。

インタビュー・文／堀越美也子　写真／宗伸隆

万作

KYOGEN

第十二回　夏季「狂言の会」

ふくおか「萬斎の会」

公演日時／ 7月19日（土）午後4時開場：午後5時開演
7月20日（日）午後1時開場：午後2時開演

公演場所／ 大濠公園能楽堂　入場料／ 桟敷席：7,350円

萬斎

●主催／ふくおか「萬斎の会」●後援／西日本新聞社・TNCテレビ西日本・FBS福岡放送・福岡教育委員会・西日本鉄道・JR九州
●協賛／舶来品のレイメイ・日本航空・九州電力（株）福岡支店・積水ハウス（株）福岡支店【福岡】電子チケットぴあ（0570-02-9999［Pコード：386-011］）・西日本新聞社1F受付